

「香取の古墳」

古代の繁栄をひもとく記録



▲三ノ分目大塚山古墳（航空写真）

「古墳時代」という名称

は、古代の高く盛り上げられた豪族のお墓から名付けられたものです。古墳時代は3世紀末から4世紀初頭に開始され、7世紀後半には終わりを告げます。時期の区分には諸説ありますが、ここでは4世紀代を前期、5世紀代を中期、6・7世紀を後期とします。

時代ごとの特徴

4世紀代の前期古墳は数量的にも少なく、阿玉台北遺跡で発掘された007号（全長約25mの前方後方墳）・山之辺手ひろがり2号墳（一辺8mの方墳）・大戸天神山古墳（全長約62mの前方後円墳）などが知

られています。

5世紀代になるとそれぞれの地域で特徴的な古墳が出現します。利根川筋の低地部では全長約123mを誇り、大王や大豪族級と目される有力古墳に多用されたといわれる長持形石棺を持つ三ノ分目大塚山古墳（前方後円墳）、黒部川上流域では豊富な武器・武器の出土で知られる布野台3号墳（全長約28mの前方後円墳）、大須賀川流域では石枕や立花の出土で知られる山之辺手ひろがり3号墳（円墳）・大戸宮作古墳（長方墳）などがあります。

6世紀代になると古墳数は飛躍的に増大し、大須賀川流域では、禪昌寺山古墳・

大法寺古墳、小野川流域では浅間神社古墳、黒部川流域では城山1号墳など60〜70mクラスの前方後円墳を主墳として、古墳群が営まれるようになります。

7世紀代に入るとこの地域では、前方後円墳は造営されなくなり、変わって仏教の導入に影響されたといわれる方墳が営まれるようになり、古墳が持ついた豪族のお墓という概念も変質してきます。さらに646年の「大化の薄葬令」により、古墳そのものも急激に造られなくなり、やがて木内廃寺のような瓦葺の本格的寺院が7世紀末には建立され、古墳はその役割を終えます。



▲大戸宮作古墳から出土した石枕と立花

市域古墳の特徴

香取市域では、約4000年で500基ほどの古墳が造営されましたが、特徴的なこととしては、5世紀前半から6世紀前半にかけて、遺骸の埋葬時に石枕と立花を使用する葬送儀礼の盛行があります。

また、埴輪を樹立する葬送儀礼は5世紀中ごろの三ノ分目大塚山古墳が最古となり、6世紀後半まで続きます。『国造本紀』によれば、香取市を含む千葉県北東部は「下海上国造」が治めていたと記されており、6世紀後半に国造が存在していたとすれば、本格的な横穴式石室を持ち、三角縁三神五獣鏡をはじめ、豊富な副葬品で知られる城山1号墳がふさわしいものと思われれます。